

きゅうり病害虫防除暦

JA庄内たがわ 令和7年(2025年)版

《殺菌剤》

2025年2月1日時点の農薬登録情報により作成

防除時期	対象病害虫								薬剤名	希釈倍率	水100ℓ当たり 薬剂量	使用時期	使用回数	使用方法	同一成分回数	RAC コード	効果		備考	
	黒星病	斑点細菌病	べと病	褐斑病	うどんこ病	灰色かび病	菌核病	つる枯病									炭疽病	コナジラミ類		予防
生育期	約10日おきに防除を実施	○				○	○	○	○	トップジンM水和剤	1500~2000倍	66~50g	収穫前日まで	5回以内	散布		F:1	○	○	
						○	○	○		アフエットフロアブル	2000倍	50ml	収穫前日まで	3回以内	散布		F:7	○	○	
				○			○	○		セイビアーフロアブル20	1000倍 1000~1500倍	100ml 100~66ml	収穫前日まで	3回以内	散布		F:12	○		繰り返し使用する場合は散布間隔を7日以上あける。
						○	○	○	○	ミギワ10フロアブル	1000倍	100ml	収穫前日まで	3回以内	散布		F:52	○	○	
			○	○						ジマンダイセンフロアブル	500~800倍	200~125ml	収穫前日まで	3回以内	散布		F:M03	○		極端な高温多湿条件下では、軟弱幼苗に薬害のおそれ。
				○	○					アリエッティC水和剤	400~800倍	250~125g	収穫前日まで	3回以内	散布		F:M04 F:P07	○	○	無機銅剤(カスミンボルドー等)との近接散布は薬害のおそれ。フロアブル剤と混用する場合、必ずフロアブル剤を最初に所定濃度に希釈してから、この剤を最後に加える。
		○		○	○	○	○	○	○	ベルコートフロアブル	2000倍	50ml	収穫前日まで	7回以内	散布		F:M07	○	○	
	○	○	○	○	○			○	ダクニール1000	1000倍	100ml	収穫前日まで	12回以内	散布	合わせて12回以内	F:M05	○			
			○						プロポーズ顆粒水和剤	1000~1500倍 1000倍	100~66g 100g	収穫前日まで	3回以内	散布		F:40 F:M05	○	○		
						○	○		スミレックス水和剤	1000~2000倍 1000倍	100~50g 100g	収穫前日まで	6回以内	散布	同一成分とみなし耐性菌出現防止のため連用を避け、総使用回数は3回以内とする。	F:2	○	○	定植直後又は幼苗、軟弱苗等・高温時には薬害のおそれ。	
						○		○	ロブラール水和剤	1000~1500倍 1000倍	100~66g 100g	収穫前日まで	4回以内	散布	同一成分とみなし耐性菌出現防止のため連用を避け、総使用回数は3回以内とする。	F:2	○	○		
	○							○	トリフミン水和剤	3000~5000倍 3000倍	33~20g 33g	収穫前日まで	5回以内	散布	EBI剤(DMI剤)(F:3)は耐性菌出現防止のため総使用回数は2回以内とする。	F:3	○	○	幼苗期に、濃緑化症状・生育抑制の恐れがあり、使用しない。	
			○	○		○	○		アミスター20フロアブル	1500~2000倍 1500倍 2000倍	66~50ml 66ml 50ml	収穫前日まで	4回以内	散布	同一成分とみなし耐性菌出現防止のため連用を避け、総使用回数は2回以内とする。	F:11	○	○	浸透性を高める効果のある展着剤の混用は薬害のおそれ。	
			○	○	○			○	ストロビーフロアブル	3000倍	33g	収穫前日まで	3回以内	散布	調整の際は、水をかきまぜながら所定量を徐々に加える。浸透性を高める効果のある展着剤の混用は薬害のおそれ。	F:21	○	○		
	○							ランマンフロアブル	1000~2000倍	100~50ml	収穫前日まで	4回以内	散布		F:21	○	○			
	○							ダイナモ顆粒水和剤	2000~5000倍	50~20g	収穫前日まで	3回以内	散布		F:21 F:27	○	○			
	○	○						カスミンボルドー	1000倍	100g	収穫前日まで	5回以内	散布		F:24 F:M01	○	○			
							○	モレスタン水和剤	2000~4000倍 2000倍	50~25g 50g	収穫前日まで	3回以内	散布		F:M10 I:UN	○	○	単用散布とする。また、高温時、定植直後や幼苗、軟弱苗等には使用しない。		

《土壌処理剤》

防除時期	対象病害虫										薬剤名	希釈倍率・使用量	使用時期	使用回数	同一成分回数	使用方法	RAC コード	備考
	1年生雑草	白絹病	つる割病	半身萎凋病	ネグサレセンチュウ	ネコブセンチュウ	アブラムシ類	アザミウマ類	ホモフジセンチュウ	ネコブセンチュウ								
定植前	○	○	○	○							ガスタード微粒剤(劇)	20~30kg/10a	播種又は定植21日前まで	1回		本剤の所定量を均一に散布して土壌と混和する。	I:8F F:M03 H:Z	
	○		○							○	キルパー	原液として 40~60ℓ/10a	播種または定植15日前まで	1回		予め被覆した内で、所定量の薬液を水で希釈し土壌表面に散布または灌水する。	I:8F H:Z	クロルピクリン・D-D及び両者の混合剤とは混合しない。希釈倍率は100倍程度を目安(但し低温期は50倍程度とする)とし、圃場土壌水分状態を考慮して適宜増減する。低温期は処理期間の延長や、耕起ガス抜きを十分行う。
										○		原液として 60ℓ/10a	前作の栽培終了後から残渣撤去まで 但し、は種又は定植の15日前まで					
										○		原液として 40~60ℓ/10a 原液として 60ℓ/10a						
					○	○					バイデートL粒剤(劇)	25~50kg/10a	播種前又は定植前 定植前	1回		全面土壌混和	I:1A	2種類の線虫とアブラムシ類にも登録あり。
							○				ネマトリンエース粒剤	15~20kg/10a	は種前又は定植前	1回		全面土壌混和		線虫と薬剤が接触することで線虫の活動を阻害。
							○			ネマキック粒剤	15~20kg/10a	定植前	1回	2回以内(定植前の土壌混和は1回以内、生育期の土壌灌注は1回以内)	全面土壌混和	I:1B	成分が土壌中で速やかに拡散し、線虫に対し長期間残効性がある。	
生育期										○	ネマキック液剤(劇)	4000倍	生育期 但し、収穫前日まで	1回		土壌灌注(2ℓ/m ²)		

《除草剤》

防除時期	適応雑草	薬剤名	使用量	散布流量	使用時期	使用回数	使用方法	RAC コード	備考
生育期	1年生雑草	バスタ液剤	300~500ml/10a	100~150リットル/10a	収穫前日まで (雑草生育期 耕起前・は種前・定植前又は畦間処理)	3回以内	雑草茎葉散布	H:10	うり類(未成熟)で登録

きゅうり病害虫防除暦

JA庄内たがわ 令和7年(2025年)版

《殺虫剤》

2025年2月1日時点の農薬登録情報により作成

防除時期	対象病害虫										薬剤名	希釈倍率・使用量	水1000当たり 薬剤量	使用時期	使用回数	使用方法	同一成分回数	RAC コード	備考	
	アザミウマ類	ミナミキイロアザミウマ	ミカンキイロアザミウマ	ハモグリバエ類	ハスモンヨトウ	ウリハムシ	ウリノメイガ	アブラムシ類	オンシツコナジラミ	コナジラミ類										ハダニ類
定植前	○										ベストガード粒剤	1~2g/株		定植時	1回	植穴処理 土壌混和		I: 4A		
	○			○							ブリロッソ粒剤オメガ	2g/株		育苗後半 ~定植時		株元散布	定植時までの 処理及び定植 直後の株元灌 注は合計1回 以内	I:28	定植時 の処理 はどれ かひとつ を選択	
	○			○							ベリマークSC	400株当り25mLの薬剤を、200(1 株当り50mL)の水に溶かす		育苗後半 ~定植当日	1回	灌注				
	○			○							モベントフロアブル	500倍	200ml	育苗後半 ~定植当日	1回	株元灌注 (50ml/株)	合わせて 3回以内(灌注 は1回以内)	I:23	軟弱な苗への灌注は、薬害を生じるおそれ。薬液が新芽にかかる縮葉等の薬害を生じるおそれ。	
生育期	○										スミチオン乳剤	2000倍	50ml	収穫前日まで	3回以内	散布				
	○										スミチオン乳剤	1000~2000倍	100~50ml	収穫前日まで	5回以内	散布				
						○					マラソン乳剤	1000倍	100ml	収穫前日まで	3回以内	散布			I: 1B	
										○	アーデント水和剤	1000倍	100g	収穫前日まで	4回以内	散布	合成ピレスロ イド剤(I: 3A) は抵抗性害虫 出現防止のため 総使用回数は 2回以内とする。	I: 3A	ハダニ類の抵抗性発達防止のため、他剤とのローテーションで使用する。この剤の年間使用回数もできるだけ少なくする。	
		○									アクタラ顆粒水溶剤	2000倍 3000倍	50g 33g	収穫前日まで	3回以内	散布				
	○										アドマイヤー水和剤(劇)	2000倍	50g	収穫前日まで	3回以内	散布			I: 4A	施設栽培のみでの登録
	○										ダントツ水溶剤	2000~4000倍	50~25g	収穫前日まで	3回以内	散布				
	○										モスピラン顆粒水溶剤(劇)	2000~4000倍	50g 25g	収穫前日まで	3回以内	散布	散布・くん煙は 合わせて 3回以内		幼苗期・高温期は薬害のおそれ。	
	○										モスピランジェット(劇)	くん煙室容積400立方メートル(床 面積200㎡×高さ2m)当り50g	100~50ml	収穫前日まで		くん煙			温室・ビニールハウス等密閉できる場所での使用	
											トランスフォームフロアブル	1000~2000倍	100~50ml	収穫前日まで	2回以内	散布			I: 4C	
	○										スピノエース顆粒水和剤	5000倍	20g	収穫前日まで	2回以内	散布			I: 5	
	○										アグリメック(劇)	500~1000倍	200~100ml	収穫前日まで	2回以内	散布			I: 6	
	○										アフーム乳剤	2000倍	50ml	収穫前日まで	2回以内	散布			I: 9B	
	○										チェス顆粒水和剤	5000倍	20g	収穫前日まで	3回以内	散布			I: 13	幼苗期(1~3葉期)に薬害のおそれ。散布後に展開する葉やその後の生育、及び果実に対しては影響ない。
	○										コテツフロアブル(劇)	2000倍	50ml	収穫前日まで	3回以内	散布			I:28	アルカリ性の農薬や肥料との混用はさける。TPNを含む農薬(F:M05・ダコニール1000、プロポーズ顆粒水溶剤等)との混用は薬害のおそれ。
	○										ヨーバルフロアブル	2500~5000倍	40~20ml	収穫前日まで	3回以内	散布			I:29	徒長したものでは散布時展開葉の葉縁に薬害を生じることがあるが、その後の展開葉および生育に影響はない。
	○										ウララDF	2000~4000倍	50~25g	収穫前日まで	3回以内	散布			I:30	
	○										グレーシア乳剤	2000倍	50ml	収穫前日まで	2回以内	散布			I:UN	
	○										プレオフロアブル	1000倍	100ml	収穫前日まで	2回以内	散布			I:21A F:39	幼苗期は薬害のおそれ。(使用は3葉期以降)
	○										ハチハチ乳剤(劇)	1000~2000倍	100~50ml	収穫前日まで	2回以内	散布			I:21A F:39	
										ダニトロンフロアブル	2000倍	50ml	収穫前日まで	1回	散布	同一成分と みなし連 用を避 ける。		I:21A	ハダニの各ステージに効果を示し、特に幼・若虫と成虫に対して効果がある。卵に処理した場合には孵化後の幼虫をよく抑える。	
										ダブルフェースフロアブル	2000倍	50ml	収穫前日まで	1回	散布	同一成分と みなし連 用を避 ける。		I:25B I:21A	ハダニの各ステージに効果を示し、特に幼・若虫と成虫に対して効果がある。残効性に優れる。微小ダニへの効果も有り。	
										ダニサラバフロアブル	1000倍	100ml	収穫前日まで	2回以内	散布	同一成分と みなし連 用を避 ける。		I:25A	ハダニの各ステージに効果を示し、特に幼・若虫に対して効果がある。残効性に優れる。	
										カネマイトフロアブル	1000~1500倍	100~66ml	収穫前日まで	1回	散布			I:20B	ハダニの各ステージに効果を示し、特に成虫に速効性を示す。アリエッティC水和剤と混用する場合、必ずカネマイトフロアブルを最初に所定の濃度に希釈してからアリエッティC水和剤を最後に加える。	
										ニッソラン水和剤	2000~3000倍	50~33ml	収穫前日まで	2回以内	散布			I:10A	殺卵力あり。卵・幼虫・若虫に効果があるが、成虫への効果が乏しい。遅効性だが、残効性に優れる。	

	卵	幼虫	若虫	成虫
ダニトロン	×	○	○	○
ダブルフェース	○	○	○	○
ダニサラバ	○	○	○	○
カネマイト	○	○	○	○
ニッソラン	○	○	○	△

ハダニ類は薬剤抵抗性が発達し易いため、ダニ剤は各剤年1回とし、他剤とのローテーションで使用する。

- ☆10a当りの散布量は、生育に応じて150~3000
- ★農薬の使用時期で「収穫前日まで」との記載は収穫開始の24時間より前に使用することを表します。(山形県農作物病害虫防除基準) 朝に収穫してその後速やかに農薬散布をし、翌朝同じ時間帯に収穫するのは問題ありません。(JCPA農薬工業会) 朝に農薬を散布して夕方に収穫する、夕方に散布して翌朝に収穫するような使用は避けてください。
- ☆農薬使用上の注意 ~農薬を使用するときは、必ず農薬のラベル表記事項を確認する~
1. 適用農作物 2. 使用量・希釈倍率 3. 使用時期 4. 本剤の使用回数・同一成分を含む総使用回数 5. 使用方法を遵守する。
- ★農薬散布にあたっての注意(農薬飛散防止など)
1. 病害虫の発生状況等を見て散布する。 2. 適正な栽培密度と通風・作業性をよくする。 3. 病害虫の温床となるものについては随時、適切に撤去する。 4. ドリフト軽減ノズルや防葉ネットの使用。
- ☆RACコード
1. 農薬ごとの作用性を分類したものを「RACコード」といい、製品ラベルなどに表示されている。 2. 農薬による耐性・抵抗性は、同一農薬、同一系統の薬剤の連用がその発生要因であると考えられている。 3. RACコードが同一であれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤なので、連用は避ける。
- ★くん煙剤使用時の注意事項
1. 室外で強い風が吹いているときは、煙が片寄ってしまい、均一な効果が出にくいので使用しない。 2. 定植直後又は幼苗、軟弱苗等には薬害を生ずる恐れがあるので使用は避ける。 3. 高温時のくん煙は薬害を生じる場合があるので、なるべく夕方温度が下がってからくん煙する。